2019年度 京都大学医療系一回生対象

早期体験実習 報告書

京都大学医学部医学科・人間健康科学科

京都大学大学院薬学研究科

2019 年度　京都大学医療系 1 回生対象　早期体験実習・報告書

もくじ

1. はじめに ---------- 2

2. 早期体験実習の目的と概要 ---------- 6

3. 学生による実習プログラム評価 ---------- 8

4. 学生は何を学んだか ---------- 12

5. 受け入れ医療機関からのフィードバック ---------- 22

6. 事後ワークショップ ---------- 26

7. 付録 ---------- 29

- 受け入れ医療機関一覧
- 実習例

8. 編集後記 ---------- 34

1.　はじめに

早期体験実習Ｉは、京都大学医学部医学科・人間健康科学科・薬学部の一回生が参加する多職種連携教育として 2013 年度にスタートしました。今年度も、医療機関及び医療者の皆様のご協力の下、学生たちは未来の医療者の土台形成につながる体験をさせていただきました。お世話になった皆様に、心より感謝申し上げます。

実習に伺う学生たちは入学したばかりで、医療についての知識や経験はほとんどありません。優秀な成績で入学しても、「将来どのような医療者を目指すのか」「何のために大学で勉強するのか」などの点で戸惑いを覚えている場合も少なくないと思います。そこで学生には、医療現場や医療プロフェッショナルたちの仕事に触れることを通して、医療者としてのやり甲斐だけでなく厳しさも理解し、今後の学部生活でどのような医療者を目指し、何を学ぶべきかをしっかりと掴んでほしいと考えています。

早期体験実習では、①自分の目指す医療者への理解、②医療での多職種連携への理解、③患者の視点からの医療への理解の三点を柱としています。本実習は、学生にとって「高校生」から「医療専門職者の卵」への第一歩となるものと期待しています。

本誌にてご覧いただけるように、病院やクリニックの医師をはじめとする職員の皆さまが、様々な点で未熟な新入生と真剣に向き合って下さり、きめ細やかなご指導をしていただきました。ご協力に、改めて深く感謝致します。

2020 年 3 月 1 日

京都大学医学教育・国際化推進センター

小西靖彦

医学部人間健康科学科の学生を、今年度も早期体験実習に受け入れて下さり、誠に有り難うございました。お世話をいただいた医療機関の皆様、医学教育・国際化推進センターの小西靖彦先生はじめ関係者の皆様に御礼を申し上げます。

医学を学び始める時期での早期体験実習は、学生の皆さんの心に、強い印象を残したと思います。実際の医療現場を体験させていただいたことが、これから学んでいくことの動機づけとなり、将来自らが目指す医療人について考える機会になることを期待しております。

医療現場での実習後は、医学部医学科・薬学部と合同で、学生版多職種カンファレンスとも言える「事後ワークショップ」を開催いただきました。自らの体験を、他の職種を目指す学生と語り合うことで、視野と人間関係を広げる大変よい機会になったと思います。

学生の皆さんが、他では得がたい貴重な体験をさせていただいたことを、本誌を拝見して改めて強く感じました。このような機会を実現いただきました関係各位に、心より御礼を申し上げます。

2020 年 3 月 1 日

人間健康科学科長

澤本伸克

京都大学薬学部では、早期体験実習の一環として、1年次夏季に「多職種連携医療体験実習」を実施しています。

「多職種連携医療体験実習」では、以下の3つの目的を掲げています。

1つ目は、外来ボランティア等、病院スタッフとしての実際の仕事にかかわりながら、患者とコミュニケーションをとり、患者の視点から見た医療、病院とは何かを理解することです。これから薬剤師や創薬研究者のリーダーとなるために、挨拶やコミュニケーションの重要性を知ると共に患者サイドの立場に配慮できる心を養い、医療人としての自覚を高められることを期待しています。

2つ目は、薬剤師の仕事の実際について体験的に理解し、自分が「こうなりたい」と思う将来像を具体的に掴むことです。

3つ目は、医師や看護師の仕事と役割について、観察やインタビューを通して学習し、複数の職種がどのように医療を支えているかを理解することです。他の医療者の役割を通して、チーム医療の中で薬剤師に期待される役割や能力とは何かを考えることも期待しています。

医療現場での実習後には、医学部医学科・人間健康科学科の学生と合同で「事後ワークショップ」を開催します。事後ワークショップでは、学生同士が実習先での体験について意見交換することで、上記3つの目的についての理解をより深めています。また、他の医療系の学生と協力してこれらの活動を行うことで、様々な職種・部署から成り立つ医療現場や製薬企業などで、建設的な議論を進めるためにはどうしたらよいのかを考え実践する第一歩にもなっています。

受け入れていただいた医療機関の皆様には、学生の教育・指導にご理解ご協力いただき心より御礼申し上げます。本誌でも紹介いたしますように、学生は実習を通じ様々なことを感じ成長することができました。引き続き、温かいご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

2020 年 3 月 1 日

京都大学大学院薬学研究科長

中山和久

2.　早期体験実習の目的と概要

本実習は、旧「外来患者支援ボランティア実習」を改編して 2013 年度から行われたているものであり、京都大学医学部医学科及び人間健康科学科、薬学部の一回生を対象としています。今年度は、医学科 110 名、人間健康学科 21 名、薬科部 13 名が参加し、全国の 42 の病院のご協力をいただき、8・9 月の一週間で実習をさせていただきました。

新・早期体験実習の目的は、次の 3 つにあります。

1.　医療者の仕事を理解する

学生は、自分が目指す医療者の仕事の実際について、シャドーイングや見学等を通して理解し、自分が目指す医療者像を具体的に掴むことを目指します。学生には、医療現場ゆえの現実の厳しさや大変さも、具体的に理解することが期待されています。

2.　医療における多職種連携を理解する

学生は、将来医療者として協働する他職種がどのような仕事をしているのか、どのようにしてチーム医療に取り組んでいるのかを理解することを目指します。このことを通して、自分が目指す医療者に何が求められているのかも掴むことを目指します。

3.　患者の視点から、医療・病院を理解する

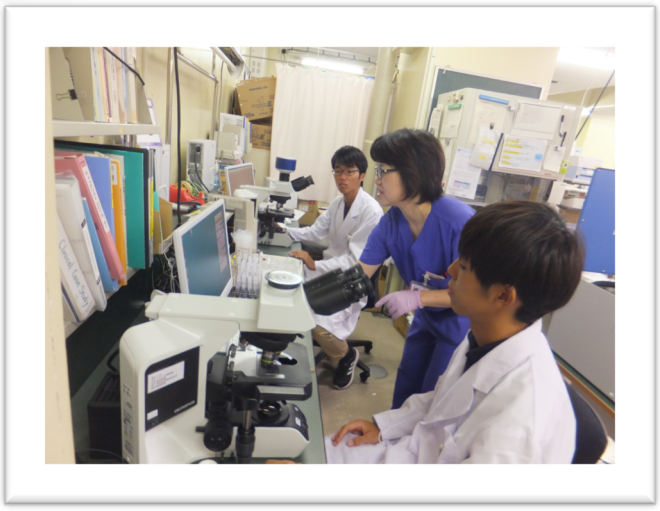
医療ボランティア等を通して、患者とコミュニケーションをとったり、病院での様子を見ることを通して患者の視点からみた医療や病院とはどのようなものかを理解します。

これらの目的をもった実習を通して、学生には、高校生から医療専門職者の卵へと「移行」してもらうこと、すぐれた医療専門職者になるためにはどのような学習・成長が自分には求められているのかを、実感として理解してもらうこと、を期待しています。

以上の目的及び意図をもつ本実習プログラムは、次ページにあるスケジュールに沿って進められます。全員に参加を求める「事後ワークショップ」では、別々に実習していた医学科・人間健康科学科・薬学部の学生が「多職種グループ」を編成して、実習を通して得たことを共有し、上記 3 つの点について理解を深められるように工夫しています。

早期体験実習スケジュール

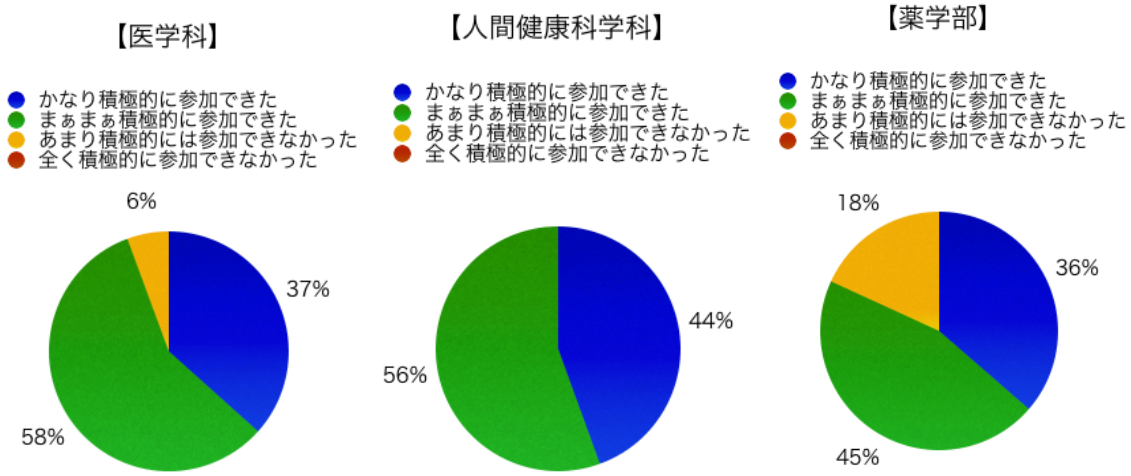
5月	第一回　事前ガイダンス （実習目的の共有、学習目標の作成）
6月	実習先の調整
7月	第二回　事前ガイダンス （事前準備と役割分担、事前勉強会の実施）
8-9月	実習の実施
9月末	事後ワークショップ • 課題レポートを持参し、グループで成果発表 • チーム医療についてのグループ・ディスカッション



3.　学生による実習プログラム評価

（2019 年 9 月 24 日実施　授業評価アンケートから）

1.　病院での実習にはどのくらい積極的に参加できましたか？　またその理由（積極的に参加できた理由、できなかった理由）は何ですか？



【概要】

ほとんどの学生が、病院での実習に積極的に参加できたと振り返っていました。

積極的に参加できなかった理由は、知識不足やコミュニケーション能力不足が挙げられており、事前学習で補ったり、グループワークなどで質問や対話する力などを高める工夫も引き続き模索できればと考えています。

- ✓　内容が興味深かったから。プログラムをしっかり組んでくださっていたから。（他 27 名）
- ✓　実際に病院の内部を知れる経験は貴重であったから。まさか、救急の対応に立ち合わせたり、じっくり手術野を見ることができるとは思っておらず、学びとる意欲をかき立てられた。（他 16 名）
- ✓　病院の先生方がとても親切に教えてくださったから。（他 11 名）
- ✓　自分の目指す医療者について関心が強くあったから。（他 8 名）
- ✓　他職種の経験ができる上に貴重な機会だと思ったから。早期の段階で、様々な医療者の仕事や、これから学ぶべきことを認識できたから。（他 7 名）
- ✓　「まだ 1 回生」であることをある種盾に、臆せず質問できたと思う。（他 5 名）

- ✓ そもそも知識がないから理解ができない。医学の知識があまりなかったため。（他 1 名）
- ✓ コミュニケーション能力が足りていないから。
- ✓ 救急センターなのであまり先生に余裕がなかった。
- ✓ 実習のプランニングが雑。病院との連絡が雑。

2. 実習の内容やスタッフの対応で最も、よかった（勉強になった、興味深かった）と感じたことは何でしたか？

【概要】

様々な診療科や現場を見学できたこと、手術見学、丁寧に教えてくださったこと、他職種の業務の説明、患者と接する機会などを、多くの人がよかったこととして挙げています。

- ✓ 幅広い業務を見せてもらったこと。かなりたくさんの診療科等を回らせていただきありがたかった。（他 16 名）
- ✓ 手術室見学。手術を見れたこと。（他 15 名）
- ✓ 1 回生なので基本から詳しいことまで丁寧に教えてくださった。色々と何をしているのか教えてくださった。（他 13 名）
- ✓ 看護実習で患者の意見を聞けたこと。リハビリでの付き添い。（他 12 名）
- ✓ 薬剤部。薬剤部の役割の詳しい内容。（他 5 名）
- ✓ 医療におけるチームワーク。他職種の方との連携が非常に円滑だと感じた。（他 5 名）
- ✓ 外来診察見学。救急外来。（他 3 名）
- ✓ コミュニケーションが大切だとおっしゃっていたこと。（他 3 名）
- ✓ 各医療者がお互いについてどう思っているかの本音。医者以外の医療者から見た医者の仕事。（他 2 名）
- ✓ 優しかった。議論が止まっている時、どこに着目するべきかアドバイスをくださった。（他 2 名）
- ✓ 医師のシャドーイング。医師の先生が空き時間に病院内を色々と案内してくださったこと。（他 2 名）
- ✓ 回診を見学できたのはとても貴重な経験になりました。（他 1 名）
- ✓ 薬の配合や手術前の手洗い方法などを実際にさせてもらえて、興味深かった。（他 1 名）
- ✓ リアルな面も見せてくださったこと。収支を合わせるなどといった、綺麗事だけでは済まされない話も聞くことができたこと。

3.　実習内容やスタッフの対応などで、困ったこと／改善してほしいことは何ですか？

【概要】

多くの学生が特に困ったことはないと挙げていました。

一方で、医療従事者の方が忙しく、待ち時間が長かったり、放置される時間を困ったことに挙げる学生もいました。特に、看護部の忙しさに関する指摘もありました。実際の医療や業務の性質上、どうしても待ち時間が生じることは出てきますので、その際にも周囲を観察して学ぶなどを取り入れていければと思います。

- ✓ 特になし。（他 61 名）
- ✓ 放置されている時間がとても長かった。看護部は忙しく、邪魔になり、ほったらかしにされてしまったこと。（他 12 名）
- ✓ 交通手段。（他 2 名）
- ✓ 言葉が難しかった。専門用語ばかりで、内容は全く理解できなかった。（他 2 名）
- ✓ 何も教えることがないと言われた。何を話すべきかまとまっていないことがあった。
- ✓ 一つの見学場所の時間が長かったので、もう少しいろいろなところを見たかった。
- ✓ 実習内容を事前に知りたかった。
- ✓ 何を見学するのかについてあまり決まっていないようで困りました。
- ✓ 救急も見たかった。
- ✓ 学ぶことが多すぎたこと。
- ✓ わからないことを誰に聞けばいいのかわからないタイミングがあった。
- ✓ 期間が短い。
- ✓ 何もわからない状態で案内係のボランティアは少し厳しいものがありました。
- ✓ フィールドノートを書くタイミングがあまりなく、書こうとした時に「これはメモしなくてもいいで」と仰られたので、書けなかったこと。
- ✓ どのような靴を履いていけば良いのか迷いました。

4.　実習全体を通しての改善点（学生のコメント）

- ✓ この医療知識の少ない１回生の時期に、５日間も病院に受け入れてもらうのは申し訳ないような印象をうける。２回生に行うか、１回生の時点で行うならもっと日程を短縮すべきではなかろうか。我々にとってはありがたいが、病院にかなり負担をかけてしまっていた印象だった。（他１名）
- ✓ 来年は知識を知った上で、さらに実習を充実させたいです。
- ✓ ２年の実習にも人間健康科学や薬学部も入れて下さい！
- ✓ 人間健康の学生はやる気があって任意参加しているが、医学科は必修なのでやる気がない人が目立ってイライラします。医学科の参加も任意にすべき。やる気のない奴は迷惑でしかない。
- ✓ 病院選びの際、アピールポイントがあれば嬉しかった。
- ✓ 医学科でかたまらないようにチームを組んだ方が、医学科生は真面目に取り組む。
- ✓ 自分があまり興味のなかった分野を見れたことはいい経験ではあったが、事前ガイダンスでは担当医の診療科と実習内容はあまり関係ないという話だったが、実際にはかなり担当医の診療科に偏った実習内容だったと思う。
- ✓ 自分が志望している職種の業務を見学したりその職種の人に話を聞いたりできるようにしてほしい。
- ✓ 医療者から頂くメッセージは、紙媒体ではなくデータで予め病院に送付した方が良いと思う。病院側も紙媒体を渡されてもその場で書くしかなく、困っていたので後日データを送り記入していただいた。

【回答】

たしかに医学や医療に関する知識がない中で、医療現場にも学生にも負担はかかると思いますが、早い段階で医療に触れることはその後の大学での学びにも役立つものと考えます。可能な限り学生が事前準備をして臨むようにできれば嬉しいです。

任意参加の人間健康学科や薬学部に比べて、医学科の学生のモチベーションにばらつきがあることは事実だと思います。任意参加というより、１人１人が主体的に学べるにはどうしたら良いかを考え、事前準備や実習内容を工夫していければと思っています。また、各病院での実習内容については、前年度の内容を参考にできるようにするなど工夫します。

4.　学生は何を学んだか

1．自分が目指す医療者について（医師・医学研究者）

多くの学生がコミュニケーション力のある医師、リーダーシップを発揮する医師、患者の気持ちに寄り添う医師を目指すことを挙げていました。様々な場面やチーム医療の現場に触れることで、コミュニケーションの重要性やチーム医療の重要性に気づけていただけたものと思います。

また、医学研究者を志す者も多く、医療現場に触れることで、患者のための研究や臨床に還元できる研究を意識していることも特徴的でした。

【コミュニケーション力とリーダーシップ】

・医師を目指す者にとって重要だと感じたのは、コミュニケーション能力である。患者との信頼関係だけでなく、チーム医療が広がり、他の医療専門職との連携が密になると、チームの中でリーダーシップをとっていくことも必要になってくる。（医）

・得られたデータや情報から正確に処方を行うことのできる医学知識を備えていることと、患者さんから状況を正確に聞き出し、また、自分の下した診断に納得してもらうことを可能にするコミュニケーション能力が必要だと思う。（医）

・今回の実習を通して、チーム医療を行う上でコミュニケーションがいかに重要かについて確認することができた。以前は、患者様との関係性についてしか考えてこなかったけれども、これを受けて、患者様にはもちろんのこと医師以外の看護師、コメディカルにも開けて、意見交換がしやすく気軽に接しられるような医師になりたいと感じた。（医）

・良き医療者となるためのあらゆる面でコミュニケーションが重要であると強く感じた。（医）

【患者さんに寄り添える医師】

・“患者さんに寄り添える医師”をテーマとしたが、そのためには患者さんの心を開ける医師であることが必要であると実習を通して感じた。（医）

・まずは「患者さんが欲しい一言」を掛けてあげられる医者になりたい。病院に来たくて来ている患者さんはほとんどいないと思うので、不安を抱えて来ている方がほとんどだろう。その不安をいかに取り除けるかどうかはとても重要なことなのではないかと思った。（医）

・もし医師となるなら私は対話をする医師を目指したい。診察において、対話を通して患者の不安を極力取り除く医師となりたい。医師にとっては「よくあるいつもの症状」または「普通に治療すれば治る病」であっても、患者にとっては不安で唯一無二のものであることを心に留めておく必要があるように思われる。（医）
・患者に信頼してもらえる医師になりたい。今回の実習では「医療者と患者の信頼関係」が特に印象的だった。患者は信頼する医師に診察されるとき元気に見えた。医療者は患者に信頼されるために、一人一人が患者のことや気持ちを理解しようと努力し、患者にとって最適 な医療は何なのかを考えていた。（医）
・医者がもっとも心得ておくべきことは、「患者は、医者のことを信頼し、すがる思いで病院に来ている」ということ。患者は、看護師や他の医療スタッフがめあてで来ているのではないのだ。これは医者の奢りではなく、患者と医者の距離が離れてようと、医者はそれくらい大きな責任があると言うことだ。（医）

【他職種や様々なことに目を向ける】
・目の前の患者だけでなく、他の様々なことに目を向けられる医師になりたい。今回の実習で多くの医療者から聞いたのが「患者の負担」や「医療費」の問題である。（医）
・今回の実習を通して得た私の目標とする医療者像は、「医療は多くの職種の方々の協力、支えあいによって成り立っていることを理解し、そういった医療に携わるすべての人への尊敬の念を持って、自らも患者のために尽力する医師、および研究者」である。（医）

【臨床と研究の架け橋、患者のための医学研究者】
・これから医学を学び研究に携わっていく中で臨床現場と研究現場との情報共有をどのように実現できるかを考え、将来は臨床と研究の架け橋的存在の医療者となりたいと考えている。（医）
・今の医療を発展させなければ成らないという一種の使命感が芽生え、いずれは患者に研究成果を還元したいという明確なヴィジョンが得られました。（医）
・今回の実習を通し、顕微鏡に向かって研究に打ち込んでいるだけでは決して知り得ない患者さんが病気と闘うリアルな姿に触れることができた。研究者の出す結果の先には一日一日を医療者に支えられながら必死で生きている患者さんたちがいることも改めて分かり、精力的に研究活動に携わっていきたいと感じた。（医）
・私は学部卒業後、医師として臨床の現場での経験を積んだのち医系技官になり政策立案に関わりたいと考えているが、今回の実習で薬価高騰、病床不足といった医療の現場が抱える問題に関して医療従事者から直接お話を聞けたのはとても有意義だったし、現今の医療の潮流についてお話をしたのも医療の将来を考えるよい機会となった。（医）

2．自分が目指す医療者（看護師・臨床検査技師）

患者の気持ちに寄り添う看護師、患者の不安を和らげる看護師、医師や他職種とコミュニケーションをとりながらチーム医療を進める医療職などが多く挙げられました。チーム医療を推進するために、コミュニケーション力だけではなく専門的な知識の重要性を挙げる方もいました。また、研究者志望の方もいて、治療方法や iPS 細胞の研究などへの関心を高める方もいました。

【患者の気持ちに寄り添う】

・看護師の方について回らせていただいたとき感じたのはやはり看護師は患者さんが自分の気持ちを話せるような雰囲気を作ることが大切であること、患者さんの不安な気持ちを和らげることが大切であること、そして看護師も他の医療者と同様に看護師として自分の得意分野を持ち、他の医療者に信頼されより良い医療の提供に貢献する必要があることである。私は助産師になりたいと考えているが、助産師にとらわれないで学び続けることが大切であると感じた。（人）

・現在私は卒業後、看護師として臨床で働くことを考えている。今回こどもに苦手意識を持ちながらこども病院への実習に参加したが、小児医療の様子を実際に垣間見、患者と触れ合ったことで、小児科で働くのもいいなという自信が芽生えた。患者の家族対応にも苦手意識を持っていたが、患者がこどもということがあり、家族はすごく献身的で一生懸命だと伺った。言葉でのコミュニケーションができない小児患者の些細な体調の変化やサインを読み取れるような医療者になりたいと思った。（人）

・看護師の方が、何か少しでも患者さんやご家族に声掛けをし、話しやすい環境を作るとおっしゃっており、私もそのような看護師になりたいと思った。また、「仕事をさせていただいているという気持ちを忘れてはいけない」という言葉が印象的だった。（人）

【チーム医療を担う知識とコミュニケーション】

・看護師は患者さんのことを一番近くで見守ることができる立場にあります。患者さんはどうしても医師と対等ではないので、看護師だけに訴える事柄も少なくありません。その内容に応えると同時により良い治療を提供するためには医師と対等に意見を交換できるだけの知識や技術が必要だと学びました。そして、その知識や技術は疾病関連のもののみならず、チーム医療をよりスムーズに行うために他の職種への理解やコミュニケーションをとることも含まれます。（人）

・きちんと他の医療者とコミュニケーションを取れる医療者になりたい。また、医師の方に、

「必要とされる人材になってほしい」と言われたのが印象的だった。医療では、自分自身の技術や知識が売り物になる。人格を含めて自分を磨き、患者さんにも、他の医療者にも、信頼され、選ばれる医療者になることが大切だと感じた。（人）
・この実習を終えて、私は助産師を目指すことに決めた。（広く深い知識が理想ではあるが）広く浅い知識より狭く深い知識を持って、自分の役割を全うすることで、チーム医療に貢献できる医療者を目指したい。また、助産師は、日本では今のところ女性しかなることができないため、その分やりがいを感じる。不安な妊婦さんの心を、私の人柄と技術で、うまくもみほぐしていけるような助産師になれたらいいなと思う。（人）

【専門性が高い看護師】
・子どもファーストの医療を実現するため、エビデンスが作れる、専門性が高い看護師を目指す。（人）

【様々なスキルを身につけた医療者】
・実習の成果を受けて技術面だけではない様々なスキルを身に着けた医療者を目指したいと強く思った。たとえばリハビリプログラムを俯瞰し、実行できるマネージメント能力や、患者さんの日常の場を理解し、それをリハビリに活かせるような生活のセンスや、他職種と行うチーム医療のためのチームワークスキルである。（人）

【機能回復へ導く OT】
・私が目指す医療従事者である OT の所属するリハビリテーション部では、患者さんを機能回復へ導き、在宅へ還そうとする国の方針を、病院の、さらに言えばリハビリテーション部の使命としているように感じられた。（人）

【医療や医学の研究者】
・私は疾病という観点で研究するのではなく人に起こった異常というように人間性質を考えたうえで誰にでも実用しやすい方策などを模索し、その方策についての意見を多方面から伺うことのできるコミュニケーション力を身に付けた信用ある医学研究者を目指したいと考えました。（人）
・実習を通して、改めて私は患者もしくはその家族のニーズに応えられるような薬や治療方法を生み出す研究者になりたいと考えた。チーム医療の勉強会の際に、強く印象に残ったのは「患者が必ずしも完治を望んでいるわけではない。」という例があるということだ。つまり完治する治療方法を生み出すことはもちろんだが、治療後の QOL を考えた治療方法をもっと突き詰める必要があるということだ。（人）

3．自分が目指す医療者について（薬剤師）

学生は薬剤師としての責務の大きさ、患者への姿勢や説明、正確さとコミュニケーション能力、高い専門性が求められていることなどを感じていました。また、新薬の開発の重要性や医療に与える影響なども挙げられていました。

【責務の大きさ】

・薬剤師の仕事は一昔前と異なり、多岐にわたっており薬物治療に対して責任を持たされるものであると分かった。（薬）

・感じたことは、薬剤師はいかに正確な仕事ぶりが求められる職種であるかということだ。まず、医師が書いた処方箋が正確であるかを確認し、間違っている場合は、医師に相談しなければならない。医師が書いた処方箋がすべて合っている日はなく、一日 30 件ほどの間違いを発見しているそうだ。医師の間違いを見落とすことなく見つけ出さなければならない。また、薬を調剤するときも間違えれば医療事故に繋がってしまう。間違いが許されない現場で、緊張感を常に持って何百、何千もの処方箋を間違いがなく調剤することは非常に集中力がいる仕事であると思った。（薬）

【患者への姿勢】

・多職種の人たちとコミュニケーションをとることで、医療の質を上げていくことは大切だが、業務が増えることで一人一人の患者にあった医療をすることは大変なことだと感じた。（薬）

・院内で働く薬剤師に必要なスキルはコミュニケーション能力で、患者さんからできるだけ多くの情報を聞き出したり、医師や看護師など他の医療者ときちんと情報共有をしたりするためにも、非常に重要である。（薬）

・服薬指導の仕方については、 なぜその薬を飲むのか、 1 日 3 回などの飲む頻度がなぜそのように決まっているのかというようなことを言うのだとうかがった。そのような説明を聞くことで患者が納得して服薬できるようになり、また患者と薬剤師の距離が近くなることで患者が気軽に質問しやすくなる。（薬）

・機械化が進む中でこれまで以上に患者と接する機会が増えていることを知った。（薬）

【高い専門性や新薬への対応】

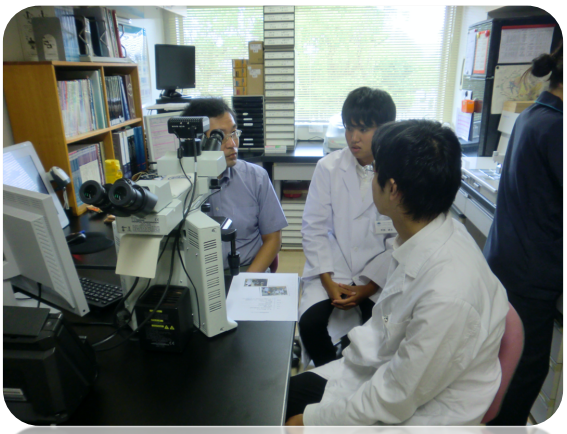
・昔には末梢レベルに作用する薬しかなかったが、最近は薬の種類が多様になって中枢のレベルまで作用できるものができたという事実だった。末梢と中枢に作用する鎮痛剤は速度面など

でそれぞれ違うが、このように機能の同じ鎮痛剤だとしても作用する場所が違う新薬が出たことで、患者さんの都合に合わせることができ、新薬の影響を感じた。（薬）

・一つの新薬でも、医療の質、またチーム医療の効率を発展させることができると感じ、その重要性を実感した。（薬）

・薬効があると知られていた薬も後に問題があると判定される場合がありうることを知り、薬の開発の難しさを再び感じるようになった。（薬）

・病院薬剤師はチームの一員として、看護師からの薬についての相談に乗ったり、医師に提言したりと、私が予想していた以上に重要な役割を担っていることも分かった。薬剤師から薬について医師に提言すれば看護師などの他の医療者よりも話を聞きいれてもらいやすいこともあるので頼りにしている部分もあるそうだし、医師も代行処方を頼んだりと医師が今までしていた業務を任されるようになったりしていることも驚きであった。（薬）



4．チーム医療について

具体的にチーム医療の場面を観察して、各職種の専門性やコミュニケーションの大切さなどが多く挙がりました。医療職同士の相互理解や、お互いの専門性を重視する姿勢にも目を向けています。一方で、チーム医療の難しさなどにも触れていただきました。

【それぞれの専門性の重要性】

・実習では、医師、看護師、薬剤師、病理など、医療に関わる様々な職種の方に仕事の内容を伺い見学をさせていただいた。実習を通して感じたのは、それぞれの専門性をもつ医療者が他職種の医療者と協力して医療を提供することの大切さだ。（医）

・他の医療者の方の見学もたくさんさせていただいた。特に印象深いのは、薬剤部、臨床工学技術課、放射線課だ。どの分野もとても専門的な技術や知識を持っておられ、医者だけではとても手に負えないようなものばかりだった。見学に行った際、「私たちのような人がいることを忘れないでね。」と言われた。（医）

・チーム医療において大切なことは患者さんの情報は共有しつつ自分の役割を果たすことはもちろん、互いの得意・不得意を把握して助けあうことだと考えた。（薬）

・看護師は患者さん相手だけでなく、医師や他の職種の皆さんと協力して仕事をする事も多い職種です。そのため、看護師は患者さんの状態だけでなく他の職種に対する理解がとても必要だと感じました。（人）

【実際のチーム医療】

・救急の現場ではよりチーム医療の重要性が高いようであった。医師の方も、「救急救命は医師だけでは行えない。看護師や技師の協力がないと成り立たない」とおっしゃっていた。確かに現場では、医師が診察・指示をし、看護師がルートを取ったり検査をしたりするという仕事の役割分担がされていて、迅速に対応することができていた。（医）

・医師以外の職種の方が医師に治療方法の提案をするという光景だけでなく、医師が看護師や他の医療従事者の方に進んで相談し意見を求める光景も実際にありました。「患者さんのためにという思いから、時には医師と意見を言い合うことだってある」と教えて頂いた看護師の言葉、そして手術室見学でも「手術室の中ではみんな平等。どの医療職種が欠けてもいけないと思っている」という医師の言葉も印象的でした。（人）

・医師を中心に、看護師、薬剤師が連携をとって、患者さんがきちんとした治療が受けられるように、心がけていることが分かった。私の実習に行く前のイメージとしては、薬剤師はチー

ム医療の中ではそれほど重要な役割ではないのではないかと考えていたが、実際に病院に行ってみると、確かに、チームに占める薬剤師の人数の割合は少ないが、重要な役割を果たしているし、他の医療者は薬剤師を頼りにしていることが分かった。（薬）

【コミュニケーションや情報共有】

・他職種のひとには、医師には見えていないことが見えている。例えば、患者さんとの距離が近いのは医師よりも看護師で、患者さんについてより詳しいのは看護師である。だから、多職種間での情報の共有は不可欠である。（医）

・担当した医師によれば、医療者間の信頼関係は挨拶などの些細なことなどから生じてくるという。医師は傲慢であるべきでなく、他医療者の専門性にリスペクトを持ち、医師以前に人間としてふさわしいふるまいをする必要があると言える。（医）

【他の医療職から見た医師】

・今回の実習を通じて医師に対し、他の医療者が感じている不満なども少し聞くことができた。医師がその不満に対して自発的に気を配らなければならないのはもちろんのこと、他の医療者の側からも改善してほしい点を、医師に伝えていけるようなフランクさも重要だと思った。（医）

・医師は指示役というイメージがあったが、地域のかかりつけ医や、他の科の医師、検査部など様々な人と調整を行っていた。チーム医療では、医療者が他の医療者に常に敬意を持つことが大切なのだと思う。（人）

【チーム医療の浸透】

・実習を通して、思っていた以上に、「如何に医療従事者同士がチームとなって患者さんに接することが重要なのか」ということへの意識が、病院で働いていらっしゃる方々に浸透していると感じた。チーム医療が重視されていた。（医）

【連携の難しさ】

・人によっては医師が他職種の提案に対してあまり柔軟でないという意見もあった。患者さんの命を救ったり、QOL を高めるといったことが医療者の人間関係の問題で妨げられるべきではないと思う。もっとしがらみなく、円滑に意見交換できるシステムがほしいと思った。（薬）

・仕事が細分化された結果、患者さんの知らないところで色々な職種が増えてしまし、結果的に患者さんのために十分な医療ができているとは言いがたい状況にある。チーム医療の病院内での実践例をみると、綺麗事の''協力''だけで片づけられる問題ではないことがわかった。（医）

5. 患者について

患者が不安を抱えていること、患者への説明の仕方、医療者の対応で安心すること、患者が主体であり力強さがあること、治したいという願望について、患者の家族への気持ちや対応など、よく観察して挙げていただけたと思います。

【患者の不安や気持ち】

・実習を通して、全ての医療関係者がそれぞれの患者のことを非常に深く理解していることに驚いた。また、患者は疾患に関連した様々な不安を抱えており、医療関係者は患者のことを理解することでその不安を軽減させることができるということを学んだ。医療関係者と患者との関わりに関して、最も印象に残ったのは看護部の見学をしたときのことである。（医）

・患者さんの言葉に耳を傾ける場合、言葉には表現されなかった裏の気持ちも考える必要がある。（医）

・病院に来る患者さんは全員、何かしらの不安を抱えているということだ。看護師などが患者さんの不安や悩みを和らげることを大切に会話をしているのを見て、医療従事者としてできることは病気の治療だけではないのだと改めて実感した。（薬）

・患者にとっての看護師とは何か、を病棟回診の際に考えた。多くの患者は看護師に迷惑をかけたくないと思っていた。しかし迷惑をかけたくないと思いつつも、看護師が居なければ動けない患者も多い。そのジレンマを看護師は理解し、行動すべきなのだろうと感じた。（人）

【患者への説明や配慮】

・医療者という立場上、食生活に限らず患者さんに指示したりする機会は少なくないだろう。しかし、それが患者さんにとって苦である場合も多いと思う。そのようなとき、医療者側が傲慢になることなく、本当に患者さんのことを思いやらないといけないと思った。（医）

・医師の話を黙って静かに受け入れている方もいれば、細かいことまで自分から確認する方もいらっしゃった。病気が全く同じでも、患者さんのもつあらゆる属性（職業、年齢、態度など）によって、診察の対応の仕方が変わってくるのだろうと思った。（医）

・患者さんに親身に接する姿勢も多くの場面で見て取ることができた。例えば、ICU では患者さんに何かするときには必ずこれから何をするか、患者さんに聞こえやすいよう大きな声で伝えていた。（医）

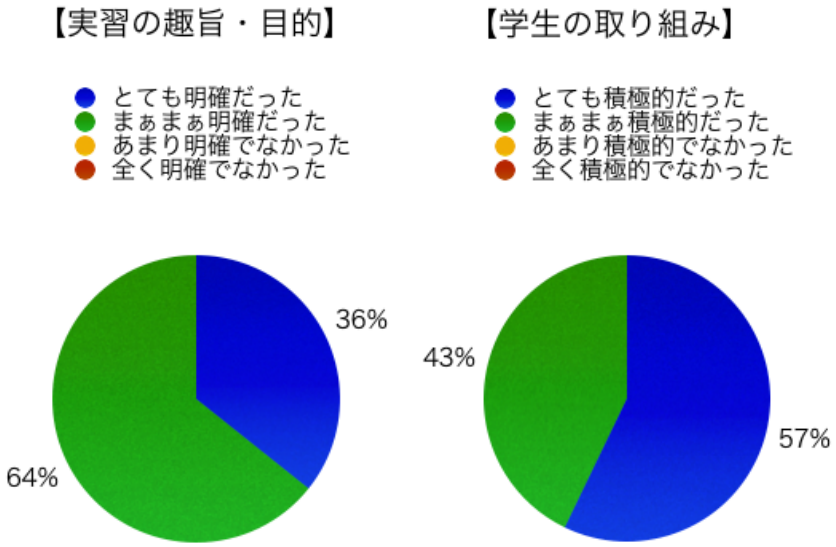
・患者さんが急性期から終末期までどの段階にいるかによって医療者側からとるべき態度にも違いがあることを認知して患者さんと向き合うことも重要だと考えた。（薬）

・患者さんの痛みと心理状態に関しての理解と共感が必要で、人の命を扱う職種である責任感も重要だが、感情だけに偏っている態度は医療者として危険なのかもしれない。なので、共感と専門性の間でバランスをとる必要があると考える。（薬）
・患者を診るには臨床能力だけでなくコミュニケーション力（患者・スタッフ相手問わず）や周りへの気遣いが必要だということがわかった。患者とのコミュニケーションは信頼関係を構築するうえで大事で、またスタッフと積極的に意思疎通を図ることは円滑に仕事を進めるうえで不可欠である。（薬）
・医療者側は当然たくさんの専門知識を持ち合わせているため、患者との知識量に差が生じる。この差をよくよく考慮して患者への説明を行わなければならないと痛感させられた。（薬）
・高齢になると手術をしても、その後回復する体力がなく寝たきりになってしまうことがある。終末期としてどのように生きるかを考え、選択しなければならないこともある。（薬）

【患者が主体、患者の力強さ】
・実習前は、患者はあくまで受け身的なものであるという印象が強かったが、患者支援部の方々の話を聞くと患者が医療の主体であるという考えになった。患者が主体であるが故に患者が十分に理解できる、自己満足的でない説明を心がける必要があるのだと思った。（医）
・診察や手術の見学をさせて頂いて、患者さんの医療従事者に対する信頼がとても大きいものだと感じました。チーム医療と聞くと医療従事者間でのものだと考えがちですが、患者さんの信頼というのもより良い治療に欠かせないものではないかと考えました。（人）
・実習中、患者さんが医療者に感謝の言葉を述べている姿をよく目にした。患者さんも退院したいという気持ちを持たれている場合が多く、病気や治療に対して前向きな方が多い印象を受けた。（人）
・患者さんは、非常に医療者を信頼していることが分かった。看護師さんが部屋を訪れると、にこりと微笑む方も、たくさんのことを質問する方もいらっしゃった。（薬）

【患者の家族】
・こども病院は子どもたちの家族も相手にしなくてはいけない。子どもたちよりも親の方が悲しむことが多いという。母親は人前では悲しみを見せないのでつらい気持ちを抱えてしまいがちだ。病院には、自分の心配を打ち明けることはなかなかできないので一人で抱え込んでしまう親が多いとのこと。（医）
・診察室での見学の時、患者さんはお一人で来られる方は少なく、必ずご家族の方やサポーターの方が一緒に来ておられました。患者さんの病態は家族の方にも多大な影響を及ぼしており、診療内容によっては家族の方へのケアが必要になってくるとも学びました。（人）

5.　受け入れ医療機関からのフィードバック



【実習の趣旨・目的・運営について】

ほとんどの病院で実習の趣旨・目的として、1.医療者の仕事を理解する、２.医療における多職種連携を理解する、3.患者の視点から、医療・病院を理解する、の３点を踏まえてプログラムを組んでくださっていることが伺えました。様々な医療現場に触れさせていただける機会を用意いただけていることに感謝しております。

・当院としての早期体験実習の目標を、「病院では、様々な職種のスタッフがそれぞれの専門性を発揮して互いに助け合いながら患者さんやご家族のための医療を提供していることを理解する。

（医療は医師だけの力で行われているものではないことを理解する）」という内容に定め、様々な医療職種の仕事を見学していただきました。医師の病棟回診、医師のカンファレンスの見学、ER、内視鏡センター、手術室の見学、MSW、リハビリ、薬剤師、看護師など、盛りだくさんの内容を用意しました。

・医学部生・薬学部性・看護学科など、学生の所属が様々ですので、当院では医師だけにつけるのではなく、消化器内科（臨床科）を主所属として、半日ずつくらい、病理・薬剤師・看護師長などにつついて回ってもらっています。病理などが意外に好評なこともあるなど、いろい

ろなことを体験してもらうのもいいかなと個人的には思っています。
・当院ではほとんどの医療職種と会えるようにスケジュールを組んでいる。他施設でもそうした方が得られるものが大きいと考える。
・こちらの、臨床実習で来るような学生とは違うことを理解して、受け入れてくれている病院各部門も、それなりに形になってきたように思います。こちらの様々な工夫がどのように受け取られているのか、ほかの施設との間での違いは大きいのか小さいのか、いろいろと気になることはあります。報告会・ワークショップなどに参加するとよいのでしょうが、なかなか都合がつけられないのが現状です。残念です。
・今回は医学科の学生が二人でした。違う学科の学生の組み合わせも他学科を知るということでは大切だと思いますが、同じ学科の学生の組み合わせということで、「医者からの視点で広く病院を見る」という目標でプログラムを作成しました。

・事前勉強会内容も先に到着していると、プログラムを組む上で参考になります。
・内科系で受け入れており、担当医の担当科関連で主にお願いして他部署を回ってもらっており、スケジュールが動かしにくくなっていますので、外科志望や担当科とだいぶ違う科が志望という場合、少しでもそちらでお願いしているのですが、急だとかなわず残念ということも多いので、通る通らないはさておき、ある程度の希望をあらかじめ伝えてもらえれば良いのにと思います。
・当院でも多様な見学・経験を念頭にプログラムを作成しておりますが、学生側からの具体的な見学希望先の要望等が早めにいただければ、多少は勘案することも可能かと思います。

→事前勉強会の内容や見学先の部署の希望などもなるべく早めにお伝えできるように用意いたします。学生側もどんな部署や仕事があるかをつかんだり、調べたりするのに時間がかかる面はありますが、私の実習目標などを共有するタイミングで希望先も伝えられるようにアナウンスしていきます。

【学生の取り組みについて】
様々なプログラムや機会を考えてくださっていることもあり、ほとんどの学生が興味を持って参加できていることが伺えます。実習態度やマナーに関しては、今後の実習や働く上でもとても大切なことなので、引き続き学生に考えていただけるように伝えていきます。

・実習を受け持った部署の担当者の多くから、二人とも好感を持てるとの意見がありました。
・高校を卒業して間もなくという時期に、しっかりした二人だったと思います。きちっとした学生たちで、良かったです。
・今回実習に来てくれた学生さんは、非常に積極的に実習に参加し、質問をたくさんしてくれました。大変好感が持てました。
・熱心に説明を聞き、学生からも質問ができていた。また、医療職からの質問には、答える努力をしていた。積極的に取り組めていたと考える。
・これまでは患者として利用していた病院を、職員側から病院を見ることが新鮮な様子でした。
また、医師や看護師・薬剤師等の多職種が連携し、全員の知識を活用して治療に取り組む姿を見て、チーム医療とはどのようなものかを感じ取っていただいたようです。
・6 名の学生とお会いしましたが、皆さんのこれからが楽しみです。やはり、診療部門の手技（脳外のアンギオ、循環器の心カテ、オペ見学）が印象に残ったという感想が多く、また、他の職種のことも知れて良かったという感想もいただきました。一年生ということもあり、病院という組織のイメージもない中、緊張しながらも学んでいただけたかと思います。
・学生は初めての医療現場に触れ，高揚感に溢れていました．医師という職業を少なからずとも実感している様子でした。
・しっかりと挨拶ができており、患者さんに対する笑顔も良かったです。
・はじめての研修で緊張感も見られましたが、見学しよう、学習しようという態度が見られて、積極的にベッドサイドにも行って、見学できていたと思います。
・職員にも患者様にも、明るい笑顔で接し、話しを聴くことができ、コミュニケ-ション能力が高いと思いました。
・真面目で、前向きに色々と吸収しようという姿勢が感じられました。
・皆さん共に真面目で真摯に講義や現場の見学、実習に取り組めていました。態度や姿勢も医療者としての適切なものでした。まだ、多くの質問が出るほどではありませんでしたが、診療の姿を実際に見ることで、個々の将来像を具体化できているようでした。本実習が今後の勉学に資するものであったと感じられ、当院としても幸いでした。
・もちろん、医療機関を裏側から見るということが初めてなので、いろいろと戸惑いはあった

と思います。多くの学生は、それを前向きに受け入れてくれていました。途中で少し疲れてしまっているように見えた学生もいましたが、何とかやり抜いてもらったと思います。
・各部門での実習・見学において、まじめな態度で取り組めていました。もう少し積極性があればなお良かったと思います。

・時間割に素直に従っている印象でした。実習目標には意見交換したとあったのですが、実際には機会をもうけても意見を言うことがあまりなく、教わるばかりと圧倒されていたようでした。一度、担当医に連絡なく帰宅されました。その日の最終の部署の担当者からも連絡を勧められたのに断ったようで、PHS を与えられており、連絡するよう説明していた上でのことでした。常識に関する注意をしました。

→連絡をするようお伝えいただいたのにも関わらず、無断での帰宅ということで、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。マナーや実習に臨む姿勢については、今後も厳しく伝えていきます。

・こちらから自己紹介をしましたがそれに続いてくれませんでした。自己紹介をお願いすると、腰に手を添え片足を前に突き出して喋り始められたのには面食らいました。
・「患者・家族・医療者に対し、笑顔と挨拶は欠かさない」「適切な、身だしなみ、言葉遣い、礼儀　を実践する」上記 2 点は、実習における「態度目標」の一部として大学から全学生に明確に伝達していただきたいと感じます。
・次年度は、「実習の具体的目標」として我々から学生に提示したく思っています。
　・患者・家族・医療者に対し、笑顔と挨拶は欠かさない
　・適切な、身だしなみ、言葉遣い、礼儀　を実践する
　・実習を通じ、患者・家族・医療者それに実習パートナーと対話する
　・様々な医療現場に身を置いて、その現場に関わる医療者が患者ケアに果たす役割と機能および相互の連携を理解する
　・医療現場に立ち会うことで、その場における患者状況と患者の気持ちを理解する
　・患者と医療者と実際にコミュニケーションすることで、患者と医療者の気持ちを理解する
　・実習の振り返りをパートナーと共有することで仲間からも学び、医療者がチーム医療において果たす役割と機能および相互の連携への理解をさらに深める

→マナーや態度目標については、事前に伝えるようにしておりますが、自覚がない学生も一定数いるのが残念でなりません。実際の場面で、注意やご指導などもしていただけましたら幸いです。事前ガイダンスなどで何度も伝えるようにしつつ、その上で、実習先でも具体的目標として提示いただけることも大切だと考えますので、お手数ですがどうぞよろしくお願いいたします。

7.　事後ワークショップ

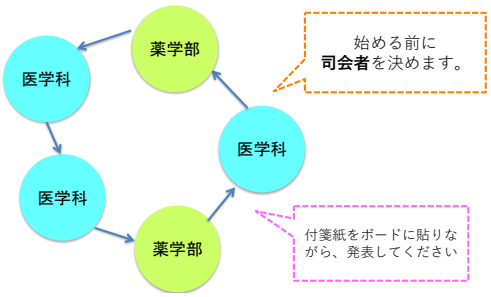
2019 年 9 月 24 に、各学生が実習成果を持ち寄ってチーム医療などについて議論する多職種ワークショップを実施しました。ご参加いただいた医療機関の皆様、誠にありがとうございました。

<ワークショップの内容>

STEP ONE

学生は参加にあたって作成したレポートを見直しながら、**自分が目指す医療者／患者／チーム医療** について自分が経験したこと・学んだことのキーワードを付箋紙に書き出し、グループ内で発表します。

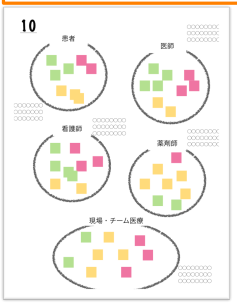
発表をする（1人につき5分程度）



次に、お互いの付箋紙を突き合わせて、専攻科や学生間の視点や理解の違いがどのような点に認められるかを話し合います。

STEP TWO

ポストイットを整理・分析する



- 出された付箋紙を整理する。
- 学生間の視点や理解の違いがどのような点に見られるかを、余白部分にメモする。

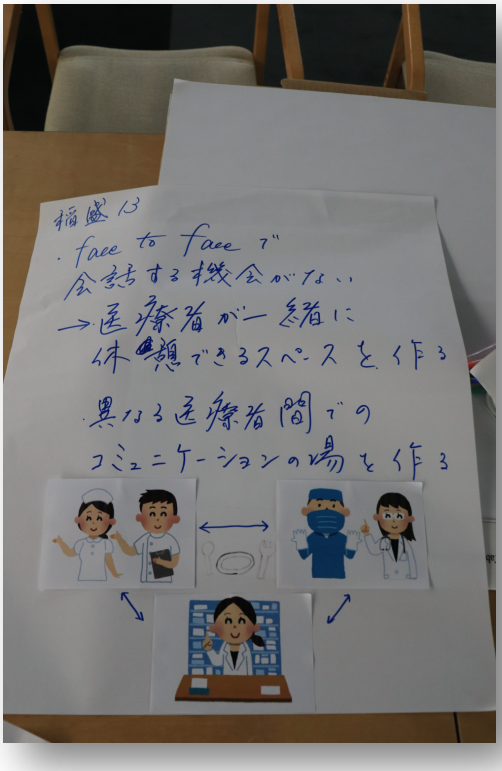
STEP THREE

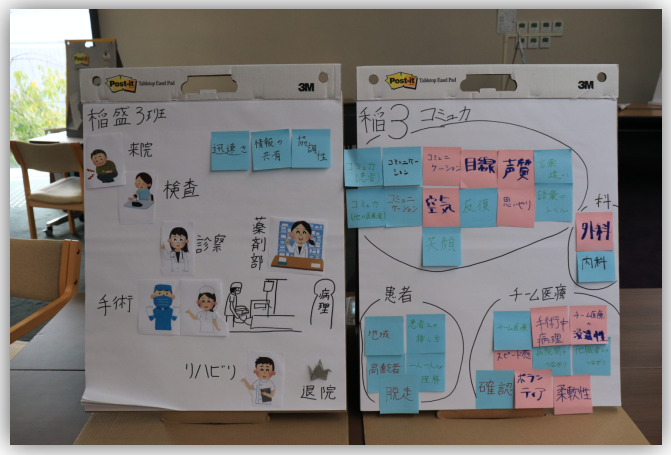
最後に、医療現場でのチーム医療の実際や課題について、具体的に経験した事例を元に話し合います。

このワークで何をするか

- ワークIIで議論された「チーム医療」の例から一つ選択する。（選択基準は、最も多職種間連携が求められる場面、もしくは最も課題を感じた場面）
- まずは、その場面で患者やスタッフがどのように関わっていたかを絵や図などにして描く。
- 次に、このチーム医療を、ここにいるグループ・メンバーで行う場合はどうすれば良いかを話し合う。その際、各メンバーの強み・弱みをどう生かすか、生じうる課題は何か、それにはどう対応するかを含める。

＜学生プロダクト＞





<参加した学生のコメント>

他の学生の体験してきたことを聞くことで自分の経験との違いを認識することが出来、他の人の解釈を知ることが出来て有意義でした。それも、同じ学科の生徒以外にも、人間健康学科の方の意見は、我々医学生とは少し異なった視点からの言及であり、他職種から見た医師像が分かり、大変勉強になりました。

医・人間・薬の三科合同で行ったワークショップは大変面白く、意義があるものだった。研究者志望の子も多く、研究者志望ではない私とは別の視点の気づきがあり、刺激的だった。

私たちの班では、私の実習先で研修医の方がおっしゃっていた、病院間での患者さんの情報共有について話し合った。患者さんの容態の変化によって病院を移る時、またはいつもと異なる場所で病院に行くことになった時、患者さんの情報を共有できるシステムがあれば患者さんの負担も減り、医療の円滑化が計れるのではないかと言う意見が出た。

自分が目指す医療者について、患者について、その他の医療者・チーム医療についての三つについて、実習で学んだことをそれぞれが発表した。このワークで最も印象に残ったのが、小病院と大病院における、チーム医療の課題の違いだ。

院内感染の対策会議など、同じようなシーンを見ていても、無意識のうちにそれぞれが目指す医療者の立場から見ていて、見え方が違ったのが興味深いと思った。自分が実習で見聞きしたこと、学んだことを発表することで、自分が医師に偏った視点で見学をしていたのだということに気づけた点でも興味深かった。

他の病院で実習した人たちは実習内容も違う上に、実習中に感じたことも全く異なった。他の人の意見は、「こんな考え方をするんだ」と、とても刺激になることが多かった。

人間健康保健学科の人はより患者さんに寄り添った視点を持っているように感じたし、薬剤部進んでいる機械化のことをより深く聞けた。

付 録

受け入れ医療機関一覧

No.	病院名	医学科	人間健康科学科	薬学部	計
1	金井病院	2	1	1	4
2	京都医療センター	4	0	0	4
3	京都桂病院	2	2	0	4
4	京都市立病院	3	1	0	4
5	沢井記念乳腺クリニック	2	1	1	4
6	丹後中央病院	2	1	1	4
7	日本バプテスト病院	2	0	0	2
8	三菱京都病院	6	0	0	6
9	洛和会音羽病院	1	0	0	1
10	医学研究所　北野病院	4	0	0	4
11	大阪赤十字病院	6	0	0	6
12	大阪府済生会茨木病院	1	0	1	2
13	大阪府済生会中津病院	3	1	2	6
14	大阪府済生会野江病院	2	2	0	4
15	関西電力病院	2	0	0	2
16	市立岸和田市民病院	1	0	1	2
17	高槻赤十字病院	2	2	0	4
18	枚方公済病院	1	0	1	2
19	神戸市立医療センター　中央市民病院	6	0	0	6
20	神戸市立医療センター　西市民病院	1	1	0	2
21	神鋼記念病院	6	0	0	6
22	豊岡病院	3	0	0	3
23	西神戸医療センター	2	0	0	2
24	姫路医療センター	1	1	0	2
25	兵庫県立尼崎総合医療センター	1	1	0	2
26	大津赤十字病院	4	0	0	4
27	公立甲賀病院	1	1	0	2
28	滋賀県立総合病院	4	0	0	4
29	市立大津市民病院	2	0	0	2
30	市立長浜病院	1	0	1	2
31	天理よろづ相談所病院	2	0	0	2
32	大和郡山病院	1	0	1	2
33	大和高田市立病院	2	1	1	4
34	和歌山医療センター	4	0	0	4
35	静岡県立こども病院	1	2	0	3
36	静岡県立総合病院	4	0	0	4
37	静岡市立静岡病院	3	1	0	4
38	市立島田市民病院	3	0	1	4
39	公立小浜病院	5	1	0	6
40	福井赤十字病院	1	0	0	1
41	倉敷中央病院	4	1	1	6
42	高松赤十字病院	2	0	0	2
		110	21	13	144

実習例

本実習では、「医療者としての土台づくり」という点での重要性を鑑み、異なる専攻科の学生であっても、同じプログラムでの実施をお願いしております。今年度も、それぞれの医療機関の特長を活かしたプログラムをご提供いただきました。以下は、学生レポートからまとめた実習プログラムの「例」です。

	午前
月	オリエンテーション 担当医師との顔合わせ／一週間の予定決め （担当：A 医師）
火	① 医療者の仕事を知る ○○科 B **医師**／ 薬剤部 C **薬剤師**／ ○○科 D **看護師**のシャドーイング
水	② 患者について知る 医療ボランティア
木	① 医療者の仕事を知る 救急外来
金	③ チーム医療の実際を知る リハビリテーションの見学・手伝い

＜医療ボランティアの具体例＞

- 外来患者受付補助・案内
- 車いす介助（リハビリへの移送等）
- 患者図書室ボランティア
- 食事介助
- 包帯巻
- 絆創膏切り
- 入院案内セット作成
- 手話体験
- 園芸（植木・花壇整備）等

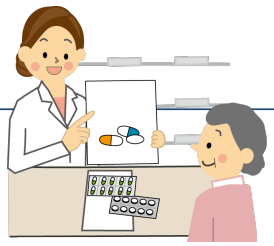
＜その他の実習＞

- 在宅医療（往診）、訪問看護への同行
- 緩和ケア病棟の見学 等

	午後
	オリエンテーション 外来見学、手洗いガウンテクニック体験 （担当：A 医師）
	① 医療者の仕事を知る ○○科 B **医師**／ 薬剤部 C **薬剤師**／ ○○科 D **看護師**のシャドーイング
	② 患者について知る 医療ボランティア
	③ チーム医療の実際を知る 多職種カンファへの出席 各部署の見学
	実習の振り返りとまとめ （担当：A 医師）

＜部署見学例＞

- 手術室
- 外来診察
- 栄養部
- 検査室
- 放射線
- 地域連携室
- 医事課
- 病棟での清潔ケア、日常ケアの見学
- NST、ICT などのラウンドに参加
- 血液浄化センター（透析）
- カルテ保管室
- 医療情報部
- 霊安室
- 糖尿病教室
- 病児保育施設等



編集後記

本年度も本学医学部及び薬学部の早期体験実習に関して、多くの学生を受け入れて、貴重な実習機会をいただきましてありがとうございます。入学したばかりで医学や医療に関する知識がほとんどない学生を、医療の現場に触れさせていただけたことで、学生たちが様々な刺激や学びを得られたことが伺えます。学生のコメントや感想でも、いろんな部署や科を見せてもらえたことや、手術室などにも入れたことなど、病院ごとにプログラムが充実していて、現場の方々が優しく親切に接してくださったことがたくさん挙げられていました。本年度は、研究に興味を持っている学生も多かったようで、感想でも医療現場や臨床に触れたことがモチベーションにつながっていたりしていました。また、一部の学生のマナーや態度に関する問題については、なかなか改善しきれていないことも伺えました。事前ガイダンスなどでもアナウンスしておりますが、至らない点や現場で不適切な言動があった場合にはご指導いただけましたら幸いです。

３月になり、社会では新型コロナウイルス（COVID-19）の影響で、様々な活動が自粛を求められ、病院での実習についても対応を余儀なくされています。早期体験実習は、１回生にとって、現場に触れて、体験を通しながら学ぶとても貴重な機会ですが、このままの形で夏に開催をするのは難しいのではないかとも懸念しています。医療者の仕事を理解する、医療における多職種連携を理解する、患者の視点から医療・病院を理解するという３つの目的を引き続き大切にしながら、引き続き充実した実習機会とできればと思っていますが、社会の情勢をみながら判断していければと考えています。新型コロナウイルスの影響が早期に収束することを願いつつ、皆様からのフィードバックをもとに今後もプログラムを発展させていければと思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

2020 年 3 月 1 日

京都大学医学教育・国際化推進センター
京都大学医学部人間健康科学科
京都大学大学院薬学研究科

KYOTO UNIVERSITY
KYOTO JAPAN
FOUNDED 1897